

策士な彼はこじらせ若女将に執愛中

目次

策士な彼はこじらせ若女将に執愛中

5

番外編 恋に目覚めた男の溺愛宣言

229

策士な彼はこじらせ若女将に執愛中

## プロローグ

「やっと二人きりになれたな」

「えっと。そ、その……」

私、瀬野沙耶は、この度会社を辞めて転職する同僚、志波直のために、先ほどまで同期十人で送別会をしていた。

その後は二次会に進むだろうと思っていたのに、なぜか皆は早々と解散してしまい、残されたのは私と直、二人だけ。どこか意図的なものを感じるが、同期の彼らに私たちが付き合っていることは教えていないから、わざとではないのだろう。

だが、私としては彼と二人きりになんてなりたくなかった。

一気に挙動不審になる私を見て、直は眉間に皺を寄せる。

こんな表情をしているときの彼からは逃げられない。

付き合い出して約三年の間に、そんなことは思い知らされている。

案の定、彼は私の手を掴んだまま、皆が向かった駅とは真逆の方向へと歩き出した。

「ちよ、ちよっと！ 直？」

「……」

「直ってば！」

振り解こうとした手は、余計に力強く握りしめられてしまった。

私に背を向けて歩いていった直が、そこでようやく立ち止まって私を振り返る。

「大人しくついてこい」

「ヤダ！」

「ヤダじゃない。俺たちは、これから大事な話をしなければならぬはずだが？」

本当は、直の言う通りである。

彼の転職先は、NY。そこに本部を置く経営コンサルタント会社に引き抜かれた彼は、来月早々に日本を発つ予定だ。

恋人である彼——直とは入社も一緒、配属された部も一緒に、長年共に過ごしてきた仲だった。

はじめはただのよき同僚という間柄だったのだが、あるときから直の猛アタックが始まり、三年前に付き合い出したのだ。

ストーカーか！ と言いたくなるほど執拗に口説かれたときには戸惑ったが、そんな情熱的な彼に惹かれていくのに、そう時間はかからなかった。

そもそも、彼を異性として意識するようになったのは、私の方が先だったのかもしれない。

入社二年目、私の父が亡くなった。

仕事に影響を出せないと、会社では明るく振る舞っていた私だが、実のところかなり無理をして

いた。

直はそれをすぐに見抜き、私を温かく慰めてくれたのだ。

あのときはまだ口説かれ始める前だったが、今思い返せば、彼のあの優しさに触れて私は恋に落ちたんじゃないかと思っている。

順調にお付き合いを続けていた私たちだったが、岐路はすぐ目の前に近づいていた。

直が、NYへの転職を決めたのだ。

その後、彼はすぐ私に決断を促してきた。

直の彼女である私も、心を決めなければならぬ。

彼について行くのか、行かないのか。

だが、私はその答えを、今日までの二ヶ月間、ずっと保留し続けていたのだ。

早く返事をしなければいけないとわかっていたけれど、決断を引き延ばしておけば、その間は直の彼女でいることができる。そんなふうと思っていた卑怯な自分がいる。

何も言わない私を見て盛大にため息をついた後、直は再び私の手を引いて歩き出した。

私が何度制止しても、止まってくれる様子はない。

半ば諦め気味になった私は、直の背中に問いかけた。

「どこへ行くの？」

「車。コインパーキングに停めてある」

今日はどうやら車で来ていたようだ。確かに、すぐそこにあるコインパーキングには、見慣れた

直の車が見えた。

だが、先ほどまで送別会で呑んでいたのだ。飲酒運転をさせる訳にはいかない。

私は、直の手をグッと引っ張った。

「直！ 運転できるの？ お酒飲んでるんじゃない……」

私の問いかけに応える直の表情は硬い。

「俺は今日、酒は一滴も呑んでいない。お前との話し合いが控えてるっていうのに、呑んでられるか。あれは酔っ払いの戯れ言だったと、後々流されたら堪らないから」

直は今夜、絶対に私と話し合うつもりだったのか。

もう言い逃れはさせてもらえないらしい。

抵抗をやめた私だったが、それでも彼の車に乗ることは躊躇してしまふ。

「ほら、乗れよ。今日は話し終えるまで帰さないから」

直は助手席の扉を開き、私を強引に車に乗せた。

動揺する私の様子に気づいているはずだが、直は小さく笑って扉を閉める。

運転席側へと移動する彼を、私はただ見つめることしかできない。

ギョッと鞆を握りしめていると、ついに直が運転席に乗り込んできた。

すぐさまスタートスイッチを押し、エンジンをかけようとすると彼の腕を慌てて掴む。

「やっぱり、ここで話そう。直」

「おい、沙耶。ここはコインパーキングだ。こんなところでは、じっくり話し合いなんてできない

ぞ?」

「わかってる。だから、手早く終わらせるわ」

「それは無理だ」

直は眉間に皺を寄せてもつともなことを言った。簡単に終わる話じゃないことは、本当は私もわかっている。だけど……

まっすぐ正面を見ていた私は、そこで身体ごと直に向き直った。

なおも早く事を済ませようとする私に、直は渋い顔をする。

「あんな、沙耶。これはそんなに早く終わる話じゃないだろう?」

「……」

「俺が実質的なプロポーズをしたというのに、お前は返事をくれていない。それどころか、ここ最近ずっと逃げ回っていた理由をきちんと話せ」

思わず無言になる私を、直はメガネ越しにジッと見つめている。

情熱的なその強い眼差しが好き。今も大好きだ。そしてこれからもずっと、私は彼を好きのままだと思っ。

彼の大きな腕の中が、私の一番好きな場所。そして、安心できる場所でもある。

そのぬくもりをずっと感じていたい。そう言ったら、目の前の男はなんて返してくるだろうか。

『当然だ。俺はお前のことが一番大事なんだ。大事な女を癒せなくてどうする?』

少しだけ眉を上げ、頬を緩めて笑う。私が一番好きな自信に満ち溢れた表情をしながら、そんな

ことを言うかもしれない。

と、不意に直が目元を緩めた。その表情に、胸の鼓動が高まっていく。

瞬きをしながら見つめ続けていると、直が身を乗り出すようにしてこちらへ近づいてくる。

その大きな手のひらが、いつものように私の頬に触れようとした途端――

私は顔を背けてそれを拒んだ。

視線を戻すと、シヨックを受けたような表情の直が見える。

胸の奥がズクツと鋭く痛んだが、私には彼の手を掴まなければならぬ理由があった。

私の実家である旅館が廃業の危機に陥ったため、どうしても私が戻らなければいけなくなったのだ。

けれど、彼の手のひらで頬を撫でられたら、私は直が欲しくなってしまう。

身を引き裂かれる思いで下した決断も、翻したくなるだろう。

直には本当のことを言わずにさよならすると、すでに覚悟を決めているのだ。

だって、それを言っただけでどうなる? どうなる?

彼はNY、私は日本。物理的に離れることになる状況で、いつまでも関係が続けられるなんて思えない。

直は仕事ができるだけでなく、容姿もよくてモテる男性だ。

NYには、彼にふさわしいキャリアウーマンがたくさんいるだろう。

めったに会えない彼女なんて、彼の負担になるだけだ。

もう、終わりにしなくちゃいけない。

それが、私にとつても直にとつても、最良の未来なんだ。

持っていた鞆かばんをさらにギョツと握りしめ、私は自分の拳こぶしを見つめた。

「私は……直について行けない」

「沙耶」

私の名前を呼ぶ直の声が、悲しみを帯びていることに気がついたが、私はその声をかき消すように言った。

「別れよう、直。私たちは別々の未来を選んだ方が幸せになれる」

それだけ言うと、私は助手席のドアを開いて直に背を向けた。

これ以上、彼の顔を平然と見つめていられる自信はない。

彼の気持ちを聞かないまま逃げてしまうことに、申し訳なさで心が痛むが、もう無理だ。

こうして顔を見ていたら、声を聞いていたら……何もかもを投げ出して『直について行く！』と叫んでしまいたいようになるから。

だが、そうすることはできない。彼には私のことなど気にせず、自由にのびのびと仕事をしてほしいのだ。

私ごときがいつまでも引き留めてはいけない。

急いで車を降りた私を、直は必死な声で呼び止めた。

「待て、沙耶。待ってて言っているだろう！」

「……っ」

「沙耶!!」

直の厳しい声に、私の身体は反射的に動きを止めた。

足が動かず、その場で固まっている私に、車を降りた直が近づいてくる。

「来ないで」と懇願こんがんしながらも、本心では「抱きしめて」と違うことを考えてしまう。

ハイヒールの先端をジツと見つめて俯うつむいていると、背後から包み込むように直が抱きしめてきた。

彼の体温を感じてしまうと、覚悟を決めて告げた言葉を取り消してしまいたくなる。

泣きそうになるのをグツと堪たえ、私は再び首を横に振った。

だが、こうして必死に拒絶しているにもかかわらず、直は一向に引き下がらない。

「俺は諦めないぞ？」

「諦めてよ。私はもう……とっくの昔に諦めた」

そんなのは嘘。私の大嘘つき。

私の口からは、自分の想いとは真逆の言葉が飛び出してくる。だけど、それでいい。それでいいんだ。

私は、直の言葉を頑かたくなに拒こほむ。

ふと、耳元に吐息がかかった。どうやら彼がため息をついたらしい。

私が再び身体を震わせると、直は私を抱きしめていた腕をゆっくりと外した。

「あ……」

思わず出ってしまった、寂しさの籠った声。

直に聞かれたくなくて、私は慌てて両手で口を押さえた。

身体から熱が離れていく。彼の腕に縋りつきたいと思う私は、まだまだ直を諦めきれていない。何かを言い出しそうになる自分の唇を、ギョツと噛みしめる。

俯く私の背中に、直が声をかけてきた。

「仕事を続けたいか？」

「……」

「NYに行くのがイヤか？」

「……」

今、口を開いたら、本当のことを話してしまえそう。

それだけは、絶対に避けなければならぬ。

「何が沙耶の心を苦しめている？ 理由を話せ。俺が納得するように全部話せ！」

直のことだ。事情を知ればこの件もなんとか解決しようと奔走してくれるのは目に見えている。

志波直という男は、とても器の大きい男だ。

俺様なくせに、一度自分の懐に入れた人間にはとことん優しい。

入社してから五年、ずっと彼の近くにいた私は、それをよく知っている。

恋人という関係になってからは、さらに直の優しさを感じていた。だからこそ、彼には私というしがらみなんて捕らわれず、好きな仕事を頑張ってもらいたい。

仕事をしているときの直は、惚れ惚れするほど格好いいのだ。彼の仕事に対しての真摯な姿勢が私は大好きだから。だから——一つの嘘をついた。

「私、このまま日本に残って仕事を続けたいの。それが理由よ」

「本当に、それだけが理由か？」

「……そうよ」

背後で盛大なため息が聞こえた後、真剣な声色で直は言う。

「逃げるな」

「……」

「そう言っても、今の沙耶は俺から逃げるつもりなんだろうな」

呆れたような声も愛おしい。そんなことを頭の片隅で思った。

この声を聞くのも、これで最後だ。

そんな事実がジワジワと現実味を帯びてきて、身体はおろか心の芯まで冷たくなっていく。

何も言わない私に、何かを決意したらしい直は、真剣な声で囁いた。

「一年後」

「え？」

ビクッと肩を震わせる私の背中に、直は言葉を投げつけてきた。

「一年後の三月、俺は日本に戻ってくる。そのときにもう一度話し合いたい。それまで俺からは連絡を取らないから、じっくり考えてほしい」



直に背を向けたまま、私は何度も首を横に振る。そうすることで、彼の言葉と声をかき消したかった。

だが、これ以上嘘をつき続けることはできそうにない。

私は直を振り返ることなく、足を踏み出す。

少しずつ早くなつていく歩調。ヒールの音をカツカツと響かせ、ついに私は直の前から逃げ出した。

「沙耶！ 俺はお前を諦めない！」

今の私にとって残酷な言葉を投げつけてくる直。そんな彼の顔を見るのが怖くて、私は急いでその場を立ち去ったのだった。

1

(どうか……どうか、旅館の借金が少しでも減りますように)

寂れた社の前で手を合わせてから、どれぐらい時間が経っただろう。

参拝客が誰もいないのをいいことに、かなり長い間祈っていた気がする。

あまりに熱心な私の様子には、氏神様もきつと戸惑っておいでに違いない。

ようやく一通りのお願い事を吹ききった私は、社にお辞儀をして家路についた。

私、瀬野沙耶。二十九歳、独身。

身長は百六十五センチ、自分ではスレンダーな体形だと思う。

胸はもうちょっと育ってくれても良かったのとは考えなくもないが、それも不満というほどではない。

ただ顔立ちは、今より少しだけ愛嬌があるとよかつたなあとは思っている。

私はフェイスラインがシャープで目が切れ長気味なため、一見すると淡々としてクールな表情に見えるらしい。

笑っていればそうでもないのだが、普通にしていると怖く見えると言われたこともある。

化粧を少し濃くしただけで性格がキツそうな顔に仕上がるため、ナチュラルメイクを心がけ、無表情にならないよう気をつけてはいるのだけど……

ストレートの黒髪も、よりクールさを演出しているのではと思います、カラーリングを試みようとしたこともあるが、結局実行前にやめた。

やっぱり黒髪が一番好きだし、自分に似合っていると思ったからだ。

外見ではクールな女と思われがちだが、本当の私はこうしてウジウジ悩むことも多い。

私の性格を知る友人知人に尋ねれば、きっと同じことを言うだろう。

小さく息を吐き出した後、私は空を見上げる。

今年の夏は酷暑だった。九月に入った今もなお残暑厳しく、今日も暑くなりそうだ。

私は、こつそりため息を落とす。

木々の隙間から零れ落ちる光の粒に目を細めていると、大木に囲まれた社の上からキレイな青空が見えた。

(直、元気にしているかしら……なんてね。振った私が心配するのは筋違いかな)

ツキンと痛む胸を押さえながら、今は遠い地にいる彼のことを思う。

志波直、二十九歳。私と同じで九月に誕生日を迎えたばかりだ。

ただそこにいるだけで人の目を惹く彼はスタイリッシュな格好を好む人で、下手をすればキザつたらしく感じる装いでも素敵に着こなしてしまう。チタンフレームのメガネも、洗練さを演出するのに一役買っていた。

そして、身長百八十七センチある体躯は、スラリとしつつも男らしさに溢れている。

いつもはラフに流している前髪がハラリと落ちたとき、なんともいえぬ色気にドキツとしてしまったことは、今でもよく覚えている。

そんな一見優しい雰囲気の前髪が、実は強引で俺様気質などところがある。でも、そのギャップが素敵だと言う女性は社内でも後を絶たなかった。

見目は上々、仕事もできる。言うことなしの男性ということで、女性社員からの視線を一身に浴びる人。

そんな彼と私は、経営企画部で五年間一緒に過ごした。

配属年数こそ同じだが、彼と私の実績では比べものにならない。

彼が会社を辞める直前、私はやっとチームリーダーに就いたところだったが、彼はすでにグループリーダーにまで上り詰めていた。

当時二十八歳という若さでその役職に就くことは異例中の異例。それだけ彼は会社に貢献し、上司部下たちから絶大な信頼を得ていたのだ。

そんな彼だから、あのままエリートコースを邁進していくと思っていたのに、ある日突然転職すると告げられた。あのときは驚いたし、衝撃を受けた。

『会社を辞めて、NYにあるコンサルティング会社に行こうと思っている。お前についてきてほしい。いや、連れて行く』

その言葉を聞いたとき、彼に愛されているんだという喜びとともに、相変わらずの俺様発言が格

好よくて、つい胸を熱くしたものだ。

けれど最終的に、私は直の手を取ることができなかった。

彼からその話を聞かされる一週間前、兄嫁が泣いて私に電話をかけてきたからだ。

『沙耶さん、お願い。瀬野に戻ってきて！どうか若女将になつてください！』

涙声の兄嫁に、私が大慌てしたのは言うまでもない。

時折鼻をすすりながら、彼女は私の実家である旅館『瀬野』の現状について話してくれた。

瀬野は、創業百十九年。東海地方の山間にある、先祖代々続く老舗旅館だ。

かつてはかの有名な文豪たちが執筆のために訪れ、逗留したと言われる名旅館でもある。

四代目であった私の父は五年前に亡くなり、その後は女将である母と番頭の兄が旅館を切り盛りしていた。

瀬野家は代々長男が旅館を継ぐことが決められており、兄も高校を卒業後、すぐに瀬野へ就職し、番頭職に就いて父に仕事を教わっていた。

『いずれお兄ちゃんが瀬野を継ぐから、沙耶は好きな勉強をしていぞ！』

という兄の言葉をありがたく受け取って、私は念願だった東京の大学へ進学したのだ。

兄が将来お嫁さんを貰うとき、小姑が瀬野で働いていたら肩身が狭いかもれない。

それでは、お互いやりづらいだらう。そう思ったこともあり、私は旅館の仕事に就かなかった。

兄が結婚した後も、あまり頻繁に帰るとお嫁さんに気を遣わせてしまうと、私は正月とお盆ぐらいしか帰省していない。

さらに、今年の正月は風邪を引いたために帰省できなかった。

だから前回帰省したのは昨年のお盆だった訳だが、いつもと同じく、特に不安になるような話は聞かなかつたので、兄は立派に番頭としての役目を果たしていると思っていた。だが、どうやらそれは違つたらしい。

兄嫁の話によると、確かに最初こそ父と同じく堅実に運営していたようのだが、兄は何を思つたのか、ある日を境に『もつと旅館をよくしたい』と奮起し始めたという。

それだけなら別に困ることもないのだが、兄はとにかく楽観的で、昔からあまり物事を深く考えないところがある。

そうしてあれこれ手を出しては失敗するということを、ここ最近では繰り返していたようだ。

『次はなんとかなるさ！』という相変わらずの楽観主義を貫いた結果、気づけば借金がかさんでいたという。

だというのに、兄は懲りずにまた訳のわからない事業に手を出そうとしている。

頼みの綱である私たちの母——もとい女将も兄と同様、楽観主義でどうにもならない状態らしい。

『沙耶さんだけが頼りなんです。もう、私の力ではどうにも……』

憔悴した様子の兄嫁の言葉に、私は青ざめたなんてものじゃなかった。

これはもう、緊急事態である。

母と兄に任せていたら、兄嫁の心配通り、瀬野は早晩経営破綻してしまう。

父が必死に守ってきた、旅館瀬野。それを兄の代で潰す訳にはいかない。

話を聞く限り、今の瀬野は崖つぷちにある。

私の実家に戻って立て直しを図らなければ、家族も従業員たちも路頭に迷うことは必至。

今の瀬野には、私が必要なのだ。現実を見ている兄嫁も、三歳の男の子を抱え、さらにお腹の中には新たな命が宿っている。

彼女一人に、この旅館の窮地を救ってほしいと頼むのは酷な話だ。

そんな事情があり、私は直の手を取ることができなかったのだ。

直が日本を発つてすぐ、私は部長に退職の旨を伝えた。

突然の申し出だったので、かなり洩られたが、事情を話すと最終的には了承し、励ましてくれた。無理なお願いだつたにもかかわらず『後のことは大丈夫だ』と言ってくれた部長には感謝の言葉しかない。

それからの私は、誰にも気づかれないうような細心の注意を払いながら引き継ぎ用のマニュアルを作り、部下たちに少しずつ仕事を移して退職の準備を進めた。

だから社内での私の退職理由を知っているのは、部長だけだ。

皆に内緒にしてほしい、という我が儘なお願いを、部長は律儀に守ってくれた。

未だに同期の誰からも連絡がこないのが、その証だろう。

当時のスマホも解約してしまったので、同期たちと連絡を取る手段はもうない。

何も言わずに姿を消した私のことを、彼らはきつと怒っているだろう。  
薄情なヤツだとも思っているかもしれない。

だけど、あのとときの私は、誰にも知られずに実家へ戻りたかったのだ。

『一年後の三月、日本に戻ってくる。そのときにもう一度話し合おう』

そう言ったときの直の表情は真剣そのものだった。一年後に必ず日本へ戻ってきて、再度私にN Yについてきてくれと言うだろう。

そうすれば、自分の意志で別れを告げたはずの私なのに、再び迷うことになる。

いや、それどころか家族を捨てて行って行くと言ってしまうかもしれない。

そうなるのが怖かったから、私は彼から逃げる選択をしたのだ。

会社を辞めるときに同期たちに事情を伝えていたら、彼らは間違いなく直に私の居場所を告げていたはずだ。

それを恐れて、同期たちにも黙って逃げてしまった。

父が亡くなったときも、会社の取り決めで慶弔関係のやりとりをしなかったから、同期の皆は私の実家がどこなのか知らないはずだ。

でも、今になって思えば、そんな心配はしなくても良かったかもしれない。

人の気持ちは変わるもの。

現に、直が言った約束の三月はとくに過ぎたが、私のもとに彼が来るどころか連絡一つ来ていない。

彼が日本を発つたのが昨年の三月。あれから一年半が経ち、今は九月に入ったばかりだ。

まあ、スマホの解約に加え、実家の詳しい住所などは彼にも話していなかったので、たとえ私と

会う意志があったとしても、居場所を突き止められずにいるのだろう。

とはいえ、そこまでして捜すほど、私に価値があるとは思えないが。

この一年半、時の流れを早く感じることもあれば、遅く感じることもあった。

旅館の経営や仕事に精を出している間は、直のことを忘れていられる。

けれど、ふとしたときに思い出すと、別れを告げたあの日から、自分の気持ちが何も変わっていないことに気づいて愕然としてしまう。

新しい人生の第一歩すら、まだ踏み出せていないのかと思うと、複雑な気持ちだ。

私がウジウジと悩んでいる間にも、直は彼らしく生きているのだろう。

そうやってほしいと望んでいたのに、なんだか無性に寂しくて苦しい気持ちになる。

私一人だけ取り残されたように感じるなんて、我が儘以外の何物でもない。

また直のことを考えてしまい、無限ループに陥りそうになる思考を頭を振って阻止した。

私に恋愛事で悩んでいる暇なんてない。そんな時間があるなら、瀬野の経営立て直しについて考えなくては。

だが、それこそが最も頭の痛い案件なので、知らぬうちのため息が零れてしまう。

今日一日で何回ため息を零しただろうか。

ため息の数だけ幸せが逃げるとよく言うが、それなら私の幸せはとっくの昔になくなってしまっていることだろう。

「さてと、そろそろ旅館に戻らなくちゃ」

銀行からの帰りに神社へ寄り道をしてしまったが、いつまでも油を売ってはいけない。急いで帰らないと、宿泊客のチェックインの時間に間に合わなくなってしまう。

私は鞆からハンカチを取り出して首筋に浮いた汗を拭き、着物の襟を直して日傘を開いた。草履の音をパタパタと立てながら、来た道を慌てて戻っていく。

すると、どこから私を呼ぶ声があった。

キョロキョロと辺りを見回すと、私に手を振っているご婦人がいる。

「沙耶ちゃん、こんにちは」

「木島屋のおばちゃん。こんにちは！」

彼女は瀬野の近くにある商店街で、木島屋という和菓子屋を営んでいるご婦人だ。

私は昔からその和菓子が大好きで、今でもよくお邪魔させてもらっている。

手を振りながら近寄ると、彼女は目尻いっぱいに皺を作ってほほ笑んだ。

「すっかり若女将が板についてきたようねえ、沙耶ちゃん」

「そうですか？ 私なんてまだまだですよ」

とんでもないと手を振る私に、おばちゃんはますます目尻の皺を深めた。

「商店街の人たちも言っていたわよ。美人若女将が帰ってきたから、旅館瀬野は安泰だって」

「ははは」

私が帰ってきたぐらいで瀬野の経営は好転しないし、美人だなんて明らかなお世辞を言われても反応に困ってしまう。

力なく笑う私の背中を、おばちゃんはポンと叩いてきた。

「そんな湿っぽい顔しないの。美人さんが台無しよ」

「おばちゃん……」

「商店街の皆、沙耶ちゃんを応援しているからね。困ったことがあったら、いつでもいらっしやいよ」

おばちゃんの気持ちが嬉しくて温かくて、鼻の奥がツンと痛くなった。

木島屋のおばちゃんだけじゃない。商店街の知り合いや地域の人たちも、会う度に同じように励ましてくれている。

それがとても嬉しい反面、皆の期待に応えることができない自分の無力さに情けなくなってしまう。

またね、と朗らかに笑って去っていくおばちゃんの後ろ姿を見送る。

あれこれ考えても直との関係は戻らないし、瀬野の経営も崖っぷち状態のまま。

今の私は恋愛なんて二の次、瀬野の立て直しのことだけを考えるべきなのだ。

私が戻ってきたとき、瀬野はかなり悲惨な状況だった。

兄嫁が泣いて絶つてくるのも仕方がないと思っただほどだ。

兄の能天気さを、私はわかっていたつもりで全然理解していなかったのかもしれない。

兄嫁に電話を貰ってすぐ、久しぶりに旅館瀬野に足を踏み入れた私は、すぐに異変を感じ取った。今まで見たことのない大きな壺や掛軸、絵画などがあちこちに飾られていたからだ。

確かに私も、ここ最近の仕事が忙しく、なかなか帰省できずにいたのだが、前回の帰省時からあまりに様変わりしていた館内に唖然としてしまった。

おまけに飾られた品々も、老舗旅館には似合わないものばかり。絵画は海外の作家が描いた抽象画だったし、掛軸にいたっては『これ、私が描いた方がうまいんじゃない?』と言いたくなるほど値打ちのなさそうな代物だった。

目が点になるとはこういうことを言うのだろうか。

あまりの衝撃に口元を戦慄かせていると、兄はいつも通り能天気な笑って言った。

「おかえり、沙耶。どう? 素敵な骨董品だろう?」

「……」

私は骨董品についてはよくわからない。だが、そんな素人の目から見ても、これらの作品はB級品にしか見えなかった。

けれど、兄は得意満面で作品の説明をし始める。

「この掛軸はね、沙耶。かの有名な文豪が書いたと言われている日本画を表装してね——」

「ねえ、兄さん」

「ん?」

兄の言葉を遮り、私は腕組みをして壁に背を付ける。

『かの有名な文豪』って、誰?」

「へ?」

「へ？ じゃなくて、それは誰かって聞いているのよ！」  
「えっと……誰だったかなあ？ で、でも！ 有名な人だよ、うん」

しどろもどろな兄の様子に、私は確信した。

これは絶対にまがい物。骨董商に騙されたに違いない。

「兄さん、この骨董品はどこで買ったの？」

「えっと、あの……」

「どこで買ったのかって聞いているの！」

「ヒイツ！」

ついに怒鳴り声を上げた私に、さすがの兄も怯えたようだ。

化け物にでも遭遇したかのような悲鳴を上げた後、恐る恐るといった様子で骨董商の名前を口にする。

すぐさま調べたところ、やはりそんな骨董商は存在していなかった。

その後、伝を辿って信頼の置ける骨董屋の主人に兄が買った品々を鑑定してもらったのだが、結果は無残なものだった。

どれもこれもまがい物ばかりだったのだ。

兄が支払った金額と実際の金額の差額は……恐ろしくて口に出したくないほどだった。

しかも、その詐欺師はすでに行方をくらましていて、連絡を取ることもできない。

泣き寝入りをするしかなく、後にはただガラクタと借金だけが残るといって大惨事だった。

それだけならまだしも、兄は様々な事業に手を出して、そちらもすべて失敗していた。

まずは旅館自慢の漬物を通信販売で売ろうと試みたようだが、初期投資にお金を使いすぎてしまい、肝心な運営が全くできずじまい。

次に古くなった客室のリフォームをすべく業者に依頼していたようなのだが、頭金を払った途端にその業者が倒産。そのまま夜逃げされてしまい、頭金として支払ったお金はすべて水の泡になってしまったという。

とにかく瀬野の現状を把握したいと思った私は、すぐさま旅館の経営顧問を務めてくれている会計士の先生を呼んだのだが……

そこで見せられた過去五年分の決算書に、目眩がした。

これだけ経営が悪化しているにもかかわらず、よくもまあ骨董品やら通販事業に手を出せたものだと思返ってしまった。

呆然として決算書類を見ている私に、顧問会計士の先生は申し訳なさそうに頭を下げる。

「番頭さんにもこのことはきちんと説明させていただいたんですが……なかなか聞き入れてもらえず……。女将にも訴えたのですが……私の力が及ばず、申し訳ないです」

先生は会計のプロだ。色々な企業を見てきている彼が指導をしてくださったというのに、聞き入れないとはなんたることか。

我が家のトップが『大丈夫、大丈夫！』と言って、暢気に笑う場面が容易に想像できた。

会計士の先生には『どうか、力をお貸しください』と改めてお願いをしたのだが……、ここから

どうやって立て直していけばいいのか、途方に暮れてしまう。

私もOL時代は会社の経営に携わる部署で働いていたが、大企業の経営と小さな旅館の経営は、似ているようで全然違うのだ。

ゼロからの出発、いやマイナスからの出発だった。

泥船に流れ込んでくる水を、バケツで必死に掻き出し続けなければ、すぐにでも沈んでしまうこの状況。所謂自転車操業というヤツである。

だが、船がなんとか水に浮いている内はそれでも足掻こう、そう心に誓ったのだ。

私が目を光らせているので、兄が新たな事業に手を出そうとすることもなく、価値のない骨董品を買うこともなくなった。

新たに大赤字を生むような事態は、未然に防いでいるはずだ。

しかし、まだまだ赤字は多いし、借金も減らない。

救いはこの瀬野に『老舗旅館』という看板があることだ。そのおかげで、常に全室埋まるというほどではないが、多くのお客様が旅館瀬野を利用してくださっている。

それに、先ほどメインバンクの融資担当者と話した限りでは、なんとか融資をしてもらえそうな雰囲気だった。

「うん、大丈夫。少しずつ、少しずつよ」

自分に言い聞かせるように頷いたとき、ちょうど旅館に辿りついた。

日傘を閉じて裏口から入ると、「若女将！」と元気な女性の声に呼び止められる。

「良子さん。どうかされましたか？」

私は額に浮かんだ汗をハンカチで拭いながら、彼女の方に向き直る。

彼女はこの旅館で長年働いてくれる仲居さんだ。女将——私の母が瀬野に嫁いでくる前から、ベテラン中のベテランである。

瀬野が今日まで営業できているのも、彼女や従業員の力があつたからこそなのだ。

その良子さんが、なんだか難しい顔をして私に近づいてきた。

「女将がお呼びですよ」

「女将が？」

私が母に呼ばれること自体は、よくあることだ。

だが、良子さんの様子からして、何やら厄介事に巻き込まれそうな気配を感じ、思わず眉間に皺が寄る。

何かを察知した私に、良子さんは小さく頷き、耳元で囁いた。

「何やらまた、とんでもないことを言い出しそうな雰囲気でしたよ」

「とんでもないこと……」

「ええ」

良子さんは神妙な面持ちで頷く。

嫌な予感しかないが、私が行かなければならないだろう。

「良子さん、そのとんでもないことって？」



大きく息を吐いて彼女を見つめたが、詳しいことはわからないと首を振る。

女将がやろうとしている『どんでもないこと』を知るには、本人に聞く以外ないようだ。

良子さんがここまで心配そうにしているということは、やはり女将はこちらの心臓に悪い、恐ろしいことをしようとしているのだろう。

考えただけで気落ちしてしまうが、こうしてはいられない。

良子さんにお礼を言った後、私は女将の部屋へと急ぐ。

すると、襖を少し開けて廊下をキョロキョロと見回す女将——母を発見した。

「何をやっているの……？ 女将」

「あらあ、沙耶ちゃん。待っていたのよお」

相変わらず緊張感のない声で返事をする女将を見て、私はガクツと肩を落としてしまう。

手をヒラヒラと上下に動かし、私に早く来てとばかりに目を輝かせている。

少女がそのまま大人になったと言っても過言ではないその態度。

私とは何もかもが正反対であるため、血が繋がっていると言われても、正直疑ってしまうほどだ。

私は慎重派であり、ネガティブ思考だ。一方の母は何事にも大胆で、ポジティブ思考をしている。

もちろん見た目も正反対。私はクール系、母はキュート系と、何もかもが違っている親子なのだ。

そんな母は、私を部屋の中へと招いてきた。どうやら人には聞かせたくない話をするつもりらしい。

盛大なため息とともに入室すると、満面の笑みを向けられた。この時点で嫌な予感しかしない。

「ほらあ、沙耶ちゃん。こっちに座って？」

「う、うん……」

そのご機嫌な様子に警戒を強めつつ、私は座布団に正座した。

だが、目の前の母はニコニコと笑うだけで、本題に入らない。

柱にかけられた時計に視線を向ける。そろそろチェックインの時間になるはずだ。

今日は平日ど真ん中の水曜日なので、宿泊客の人数は少ないが、若女将としてはお客様一人一人にしっかりと挨拶をする必要がある。

未だに話を切り出さない母に痺れを切らし、私は背筋を伸ばして冷やかな視線を正面に向けた。

「女将」

「あらあ、なあに？ 沙耶ちゃん」

「なあに？ じゃないわよ。女将が私を呼んだんでしよう？」

「もう、そんなに怒らないの。沙耶ちゃんは、せっかちなんだからあ」

「せっかちって……女将、もうすぐチェックインの時間ですよ！」

語尾を強めに発音して窘めるも、「まあ、本当ねえ」と相変わらず間延びした声で返事が返ってくるだけだった。

チェックインの時間は刻一刻と近づいている。会話を始めない女将に付き合っている暇はない。

「女将。なんだか時間がかかりそうだから、話は後で聞きますね」

とにかく今は、早々に退出した方がいいだろう。

早くお客様をお迎えする準備をしなければと腰を上げた私を、女将は再度止めてきた。けれど、やはり本題には入らず、ニコニコと笑っているだけだ。

「だから、時間がないんだって！ お母さん！」

仕事中はいつも『女将』と呼びかけているのだが、苛つきあまり、つい素が出てしまった。慌てて口を押さえる私に、母はフツツと楽しげに笑う。

「いいのよ、沙耶ちゃん。だって私は、貴女のお母さんで間違いないんだもの」

「それは、そうだけど……でも、今は仕事中でしょう」

「もう、沙耶ちゃんってば。相変わらず真面目で堅いんだからあ」

女将はもう少し堅くなつてしつかりした方がいいと思う。

そう伝えようとしたのだが、次に女将が発した言葉に、私の口からは気の抜けた声しか出なかつた。

「え？」

「もう！ 沙耶ちゃん、きちんと聞いていたの？ ……だからあ、うちの経営立て直しを、経営コンサルタント会社の人に頼んだからね」

「ハア!?」

「うふふ、近々会社の方が来られるから。沙耶ちゃん、お話を聞いてあげてね」

言うことは言つたと満足そうにほほ笑む女将の態度に、私は啞然としてしまう。

経営のことはほとんど兄任せだった女将なのに、どうして突然やる気になったのだろうか。

何より、彼女の口からコンサルタントなんて言葉が出てきたことがビックリだ。

女将の知り合いにコンサルタント会社の人がいるとは聞いた覚えがないし、もしかしたら、詐欺に遭っているんじゃないだろうか。

「女将……どういふことですか？」

「どういふことって？ 沙耶ちゃんってば、おかしいこと聞くのね。だって、瀬野は潰れかかっているでしょ？ だから私もなんとかしなくちゃって思つたのよ」

確かにその通りだし、だからこそそのコンサルティングだ。けれど、まさか女将の方からそれを提案してくるとは思わなかつたから聞き返したのに。

いつものパターンだと、これはきな臭い。完全に黒。騙されているに違いない。

私は再び腰を下ろして正座する。スツと背筋を伸ばし、真剣な面持ちで女将を問い詰めた。

「それ、どこのコンサルタント会社？ 騙されているんじゃないの？」

「もう、沙耶ちゃんってば。大丈夫よお」

絶対に大丈夫じゃない。このまま放置しておけば、絶対に痛い目に遭うはずだ。

コロコロと可愛らしく笑う女将は、私のこの不安げな態度を察知できていないのだろうか。

世間話をするような軽い口調で続ける。

「ちようどね、沙耶ちゃんが銀行に行っている間にお見えになったから、お話を聞いたのよ」

「つて……ついさっきのことなの？」

「そうよお」

ニコニコ顔の女将に、私は頭を抱えた。

私が銀行に行っていたのは、時間にして小一時間ほどのはずだ。

その短い時間で、自称コンサルタント会社の人間は、よほどうまく女将を丸め込んだらしい。

これは凄腕詐欺師に間違いないだろう。

元々、女将も兄も騙されやすい性格だ。

すぐに人を信用してしまうお人好しなので、騙されていても気がつかない。

それだから、今この旅館の経営が崖っぷちに立たされているというのに、女将はまだ懲りていないようである。

私は女将の両肩に手を置き、説得を試みた。

「女将、それはどう考えても詐欺よ」

「だからあ、大丈夫だって。きちんとした会社の人よ？」

「きちんとした会社の人って……どこの会社の誰よ」

相変わらずの危機感の薄さに苛立っていると、女将は朗らかに笑う。

これは私をどうにかして煙に巻こうとしているときの態度だ。

気づいた私は、再び同じ質問を繰り返す。

「で？」

「ん？」

「そのコンサルタント会社の名前は？ 担当者名は？」

「あら〜」

「あら〜って……まさか、聞いていないの？」

「聞いたのよ？ だけど、お名前を忘れちゃったわ」

「はあ!？」

頭痛がしてきた。ガツクリと項垂れる私に、女将は慌てて言い募る。

「でも、大丈夫！ 大きな会社だって言っていたし、なんかアメリカに本社があるんですって」

「だから！ それが嘘かもしれないんだってば！ まさかもう、契約金とか払っていないわよね？」

「沙耶ちゃん、怖いわあ〜」

「怖いわけじゃない！ 私は真剣に聞いているの！ 仮にその話が本当だとしても、有名コンサルタント会社にお願ひできるほど、我が家にお金はないわよ！」

そんなところに頼める余裕があるなら、とつくの昔に頼んでいる。

必死にあれこれ立て直しを図ってやっとこれからというときに、さらに多額のお金が必要になるなんて……お先真つ暗だ。

怒りに任せて女将に詰め寄ると、彼女は首を横に何度も振る。

「大丈夫よ、沙耶ちゃん」

「全然大丈夫じゃないっ！」

いい加減泣きたくなってきた。先ほど銀行に行ったのだから、融資のお願いをするためだったというのに……

この上コンサルティング料を取られるとなれば、経営立て直しどころか、その契約料のせいで旅館が潰れる可能性だってある。

本末転倒、まさにその言葉を地でいくつもりか。

泣きたい。だが、泣いている場合じゃない。

グツと唇を噛みしめていると、女将は慌てて口を挟んできた。

「大丈夫！　だってタダなんですから」

「タダ……？」

思わず耳を疑った。驚いて女将に視線を向けると、満面の笑みでピースサインをしている。

「これは頼まなくちゃ損だと思ったの〜」

誰か私を助けてほしい。こめかみをグリグリと押さえながら、ため息を何度も零す。

私より長く生きているはずなのに、この人はどうしてこうも常識が欠落しているのだろう。

——タダより高いモノはない。そんなの世間の常識だ。

この母親にして、あの兄あり。本当に頭が痛い。

亡くなった父がこの場にいたら、絶対に女将を叱っていたはずだ。

やっぱり私が戻ってきて正解だった。

ダンと音を立ててテーブルにつき、未だにはしゃいでいる女将を私はジロリと睨みつける。

「とにかく、この話は断るから」

「何言ってるのよお、沙耶ちゃん。こんないい話ないでしょ？」

「いい話すぎて、信用に欠ける！　とにかく、その担当者が来たら断るからね」

「えー、だってこの旅館、このままじゃ潰れちゃうわよ？」

そうなってしまったのは誰のせいかと問いたい。

腰を上げて襦袢に手をかけると、私は女将を振り返った。

「うまい話に乗って、今までどれだけ痛い目に遭ったと思ってるの？」

「むー、それはお兄ちゃんでしょ？　私は話に乗ってないもん」

「兄さんを止めなかった女将の責任でもあるの！　とにかく、お断りするからね！」

勢いよく襦袢を閉めたが、女将はまだ何やら文句を言っているようだ。

それを聞かないふりをして、私は急いでフロントへと向かう。

「本当に油断も隙もない！」

まだまだ先は長いが、赤字は少しずつ減ってきているのだ。

今、いらぬ投資はしたくないし、そんな局面でもないだろう。

とにかく、私とその経営コンサルタント会社とやらを蹴散らして、この話はなかったことにさせなくちゃ。

なくちゃ。

グツと拳を握って決意を固めていると、ロビーに人が入ってくる気配がした。お客様だ。

私は慌ててそちらへ向かい、旅館についたばかりの彼らに笑顔を向ける。

「ようこそおいでくださいました。お荷物お持ちいたしますね」

今日はあまり予約が入らなかったが、まだあと二組はいらっしやる予定だ。

とにかく今は、目の前の仕事に集中しなければならぬ。  
若女将として恥ずかしくないよう、そして——この旅館瀬野を守るために頑張ろう。  
決意新たに、私は背筋を伸ばしてお客様に笑顔を向けた。

2

「若女将！ お電話が入っていますよ」

「ありがとうございます。良子さん。どなたから？」

「若女将が以前勤めていた、東京の会社の同期だとおっしゃる方からで……」  
「っ！」

言葉をなくす私に、良さんは笑顔で電話の子機を渡してきた。

「片付けは済みましたし、ここも大丈夫ですから。若女将はもう上がってください」

「で、でも……」

良さんの言う通り、客室から夕食のお膳はすべて下げ、お布団も敷き終わっていた。

後は諸々の片付けがあるぐらいなので、時間に余裕はある。

だが、その電話にはあまり出たくないので、できれば仕事が忙しいと言って切ってしまいたかった。

けれど、そんなことを知らない良さんは私に気を遣ってくれているようで、ニコニコとほほ笑みかけてくる。

「久しぶりなんですよね？ 積もる話もあるでしょうし、ゆっくり話してきたらどうかしら」

「そ、そうですね……」

確かに積もる話はある。でもその大半は、私が謝罪しなければならない案件ばかりなのだ。頬を引き曇らせている私の背中を押してくる良子さんに、私はついに厨房から追い出されてしまう。

「ほら、ここはもういいですから。お疲れ様でした、若女将」

「お、お疲れ様です。ありがとうございます」

お礼を言うと、良子さんは小さく頷いて厨房に戻ってしまった。

誰もいない静かな廊下で、私は恐る恐る保留を解除して子機を耳に当てる。

「もしもし」と電話に出ると、懐かしい人の声がした。だが、恐ろしいほど低い声だ。

『あゝら、若女将。ずっとそんなところに隠れていたの？』

『文恵……よね？』

『そうよ、文恵さんよ。貴女が以前勤めていた会社の、同期だった文恵さん！』

怒り心頭といった様子の文恵に、私の口元がヒクつく。

電話の主は、会社の同期、秋野文恵だった。

同期の中で一番仲良くしていた彼女にも、私は何も言わずに行方をくらましたのだ。彼女の声に怒りが含まれているのも当然である。

申し訳なさに言葉を詰まらせていると、文恵は盛大なため息をついてから呟いた。

『元氣そうね』

「うん……文恵は、元氣だった？」

『ええ、元氣よ』

「良かった」

ホッと胸を撫で下ろしたそこで、一つの疑問が湧き上がってきた。

——どうして彼女は、私に電話をかけてくれたのか、ということだ。

私が退職したのは一年前。それも直属の上司にしか事情を告げず、逃げるように会社を去った。

仲良くしていた同期たちにとっては、まさに寝耳に水の状態だったと思う。

彼らは、私が会社を辞めた理由も、私がどこへ行ったのかも知らない。

実家に戻ることくらいは考えたかもしれないが、私の実家が旅館を営んでいることは彼らにも話していなかった。

それなのに、なぜ……？

私は、文恵に疑問をぶつけてみることにした。

「ねえ、文恵。どうして私が実家にいることがわかったの？ それに私、実家が旅館だって、誰に

も話していなかったよね？」

『まあ、そうね』

「それなのに、どうやって……あ！」

一つだけ方法がある。というか、それしかない。

確信を持った私に、文恵は不気味な声で笑った。

『フフフ、経営企画部の部長から聞き出したわ』

「やっぱり……」

誰にも言わない約束だったのに……

言葉もなくした私に、文恵は今もお、不気味に笑っている。

『大変だったわよ。部長ったら、なかなか口を割らないんだもの。あの手この手でねえ。ようやく聞き出せたわ、うふふ』

怖い。怖すぎる……

同期どころか社員の間でも『姉御』と称されるほどやり手な文恵だ。

その文恵に睨まれて、部長は震え上がったんじゃないだろうか。

そう考えると、部長はむしろ被害者だ。

辞めてからも迷惑をかけてごめんさい、とここにはいない部長に心の中で謝罪する。

それにしても、なぜ今文恵は私の居場所を聞き出したのだろうか。

私が突如として姿を消したのは一年前なのだから、そのときに聞くのが普通だろう。

あえてこのタイミングで私の居場所を探ることに、何か意味でもあるのだろうか。

そんな私の疑問に答えるように、文恵はポツリと呟いた。

『沙耶。私、結婚するの』

「え！ 本当に？ おめでどう!!」

吉報に、自分の今の立場も忘れて喜ぶと、電話口の文恵は声色を和らげた。

『おめでどうって言ってくれるのね』

「当たり前でしょ!? 私たち、友達じゃない」

興奮のあまり口走った後に、ばつが悪くなった。

私は、今も文恵のことを友達だと思っている。だけど、彼女の方はどうだろうか。

もう友達だなんて思っていないかもしれない。

ズンと落ち込む私に、けれど文恵は弾んだ声で言った。

『ありがとう。私たち、離れていったって友達だよね!』

「文恵……!」

鼻の奥がツンと痛くなった。

感動のあまり、嬉し涙が零れそうになる。

鼻をすすろうとした私に、電話口の文恵はポツリと呟いた。

『私たちは友達。その認識でいいわよね?』

「う、うん……」

もちろんだ。文恵さえ許してくれるなら、友達のままでもいい。

だが、その声がどこか威圧的に感じて、私は目を瞬かせた。

電話口の向こうにいる文恵の姿を見ることはできないが、口角を意地悪く上げているような……

そんな気がする。

肯定したことで、何かヤバいことが起きるんじゃないだろうか。

言葉を詰まらせた私に対し、文恵はクツクツと意味深に笑う。

その怪しげな声を聞いて、ますます疑惑は深まっていく。

『友達なら、私の結婚を心から祝福してくれるわよね?』

「そ、そりゃあ……もちろん」

子機を手に、何度もコクコクと頷く。

文恵が幸せになるのだ。嬉しいに決まっている。だけど……

言葉を濁す私に、文恵は命令してきた。

『いいこと、沙耶。私の結婚を祝ってくれる気持ちがあるのなら、次の水曜日に東京へ戻っていらっしやい』

「えっ!？」

『いつもの居酒屋で、同期皆が私の結婚祝いパーティーを開いてくれる予定なの。もちろん、沙耶も来てくれるわよね?』

「……」

『来なさい。絶対に、来なさいよ!』

いいえとは言わさないわよ、と脅してくる文恵に、私は尻込みしてしまう。

どの面下げて、今更同期たちの前に出ていけるというのか。

無理。絶対に無理だ。一人で首を横に振った後、私は逃げの姿勢を見せる。

「えっと……水曜日は、仕事が忙しくて」

旅館に電話をかけてきたのだし、私が若女将であることを知っているくらいなのだから、その忙しさは文恵にも想像がつくはずだ。

ということは、仕事を理由に断れば、さすがの姉御も諦めてくれることだろう。

「うちはさ、少人数で回している旅館だから。私がいなくなると、対応できなくなっちゃうんだよね」

嘘だ。平日の中日は宿泊客も少ないので、私一人抜ける程度、何も問題はない。

その上、次の水曜日は大浴場のメンテナンスを行うため、もともと旅館は休みの予定だったのだ。とにかく、この場では嘘をつき通そう。私はどうしたって文恵や同期たちと顔を合わせることはできないのだから。

心の中で土下座しつつ、私は電話口にいる文恵に謝罪する。

「ごめんね、文恵」

行きたいんだけど行けない。そんなニュアンスで断った私に、文恵はフフフとこれまた恐ろしく低い声で笑った。

『大丈夫よ、沙耶』

「え?」

『水曜日はお休みなんだから、来ることができませんでしょ?』

「っ!」

なんでそのことを。口元をヒクつかせていると、文恵はフンと鼻を鳴らす。